

慢性腎臓病（CKD）とIgA腎症

腎臓病といえば、足のむくみ、血尿、食事制限、透析療法などを連想する方がいるかと思います。最近注目されているCKDとは、原因の種類を問わず、検尿や超音波検査などの異常、または血清クレアチニンから推定した糸球体機能が60%未満の状態が3ヶ月以上続く場合と定義されます。

検尿において血尿+蛋白尿がペアで指摘された場合、腎臓専門医はまずIgA腎症を考えます。IgA腎症は慢性腎炎の中で最も多く、また若年者に多い疾患です。1997年までは慢性腎炎が透析導入の最大の原因でした。IgAとは免疫グロブリンAのこと、通常は唾液、腸液などに含まれ、細菌の体内への侵入を防ぐ働きがあります。このIgAが何らかの免疫学的異常で自分の腎臓を攻撃してしまったのがIgA腎症です。IgA腎症の進行は極めてゆっくりですが、20年後には30%程度が透析に至ると言われております。

以前には慢性腎炎といえば、保存的療法が行われた時代もありますが、IgA腎症に対しては根治的治療として扁桃摘出術+ステロイドバルス療法が開発されました。口蓋扁桃がIgAの主要な産生部位だからです。当院では1999年にこの治療を開始し、現在までに200人以上の方に施行しました。この結果、3年で84.8%、5年で88.9%という高い寛解率（=尿蛋白および潜血陰性で病気の進行しない状態）を得ることが出来るようになりました。